

中年期の自我同一性に関する研究

岡 本 祐 子*

A STUDY ON EGO IDENTITY IN MIDDLE AGE

Yuko OKAMOTO

The purposes of this study were to clarify the characteristics of psychological changes in middle age from the viewpoints of eight stages of ego identity in Erikson's Epigenetic Scheme (1950), and to specify the reconfirmation process of ego identity and identity status. Method: a sentence completion test (SCT) was carried out by 49 subjects between 40 and 56 years old, and an interview was done to 22 of them. Results: (1) There were positive and negative aspects in the psychological changes in middle age. (2) The process of ego identity reconfirmation in middle age had the following four stages: a) The crisis period with the awareness of the changes of somatic sensation; b) The period of the psychological moratorium; c) The period of modification or turnabout of the life track; and d) The period of ego identity reconfirmed. (3) Four Identity Statuses were specified by the analysis from the viewpoint of Marcia (1964)'s identity status. These findings suggested that middle age was one of the transitional period in life cycle playing an important role for identity achievement.

Key words: adult development, identity crisis, identity status, identity reconfirmation process, middle age.

問題および目的

人間の精神発達をライフサイクル全般にわたってとらえようとする成人期の発達に関する研究は、近年急速に増加しつつある。精神分析的自我心理学の領域においては、Erikson (1950) の提出した人格発達分化の図式、Epigenetic Scheme がその理論的基礎を与えるものとなつた。この図式によって Erikson は、人間生涯全般にわたる心理・社会的発達段階を明確化し、成人期においても発達的な危機があることを示している。これまで成人期は、発達的な方向性を持ったものとは見なされず、成人期におこる心理的変化や危機的な現象に対しては、その時々の状況に応じた解釈がなされてきた。それに対して、成人期にも発達的な方向性とそれに対応した危機があることを示した点は、Erikson のすぐれた洞察の1つ

である。

Erikson (1950) によれば、自我同一性の獲得は、青年後期の課題である。しかし、個々人の自我同一性は、青年期以降もさまざまな心理・社会的変化を契機に問い合わせられ、再吟味されて、さらに成熟していくものであろうと考えられる。また、成人期にみられる発達的危機期におこる心理的変化は、自我同一性の成熟に重要な意味をもつと思われる。ところが、青年期に獲得された自我同一性が、以後どのように変化するのか、あるいは変化しないのかという問題は、いまだ未踏の領域であり、わずかに、Donovan (1975 a, b), Marcia (1976) らの青年期の同一性ステータス研究によって、問題提起ないしは示唆されているにすぎない。

ところで、一般に中年期は、生物学的にも社会的・心理学的にも、また家族サイクルの側面においても変化の多い時期である。身体的には、体力の衰えを感じ始め、職業的には自分の能力や地位の拡大に限界が見え始める時であり、若い頃設定した自分の人生の夢とその達成度

* 旧姓 武則

* 広島大学教育学部 (Department of Psychology, Hiroshima University)

を改めて問い合わせる時もある。多くの家庭では、子供達は青年期に達し自立しようとしている。しかし、中年期におこるさまざまな変化に関して組織的に行われた実証的研究は少なく、中年期のとらえ方には、この時期を比較的ストレスの少ない平穏な時期であるとする「平穏説」(Neugarten, 1968; Lowenthal, 1972; Livson, 1976) と、人生の中で危機的な転換期であるという「危機説」(Jaques, 1965; Sheehy, 1974; Levinson, 1974, 1978; Lionells & Mann, 1974; Rosenberg, 1976) の一見、相矛盾するように思われる2つの立場が見られる。

本研究は、中年期の心理的変化の内容とプロセスを、自我同一性の視点から考察したものである。本研究は、以下の3点を目的として行われた。

1. 中年期の心理的変化の特徴を、Erikson (1950) の図式に示された心理・社会的課題（基本的信頼感、自律性、自主性、勤勉性、自我同一性、親密性、生産性、自我の統合）の観点から明確化する。
2. 中年期の心理的変化を、中年期における自我同一性展開のプロセスとして総合的に考察する。
3. 1.2. でみられた状態像を自我同一性ステータスの視点から分析することにより、個々の被調査者間に見られた相違について検討する。

まず、予備調査によって、中年期の心理的変化の概要を把握した。次にこれを基盤に、本調査では個人面接を行い、上記の3点に焦点化しさらに分析、検討を加えた。

予備調査

目的

中年期の心理的変化の特徴の概要を把握し、本調査の対象者を選択する。

方法

(1)被調査者

1. 研究者（大学教官）、2. 会社員、3. 事務系公務員、4. 高校教員、5. 看護婦、6. 主婦の6職業群に属する40～56歳の男女49名（男性31名、女性18名、平均年齢47.3歳）。第5群の看護婦群は、就労している既婚女性という意図で設け、第6群の専業主婦群との比較を試みた。

(2)手続

①以下の内容からなる文章完成法（SCT）39項目。これは、時間的展望、家族、仕事、自分の人生など、Eriksonの図式に示された心理・社会的課題や危機の諸側面に焦点化した26項目、および中年期の心理的特徴が現われやすいと考えられる13項目（例、「40歳になった時、私は」、「私が自分の年齢を意識するのは」、「年をとるにつれて」、「私の一生のうちで今は」、「子供が独立する

と」、「私は自分の一生を振り返ってみて」など）からなる。②身体的精神的自覚症をたずねる二者選択式の質問128項目。これは、Cornell Medical Index (CMI) より、中年期以降に関連の深い125項目を選択し、3項目を筆者が追加した。これは、被調査者の身体的精神的健康度をおさえることを意図し、補助資料として用いた。

質問紙は郵送によって配布回収され、回収率は98.0%であった。

結果と考察

SCTに対する反応は、以下の観点から内容分析を行った。中年期の心理的特徴に関するSCT 13項目は、①40代を迎えた時の意識、②自分の年齢に対する意識とその契機、③現在のライフステージに対する意識の3点について分析した。Eriksonの心理・社会的課題や危機の諸側面に関する項目は、各項目別に特徴を分析した。

(1)中年期に対する意識

40代を中心とする中年期に対する意識は、SCT「40歳になった時、私は」、「私の一生のうちで今は」に対する反応に最も顕著に現われていた。

40代を迎えた時の意識に関する特徴は、TABLE 1に示した。TABLE 1に示したとおり、「(40歳になった時私は)これからやるぞという気持ちだった。」「人生半ばだ。がんばらなければと思った。」など、生産的、活力的自覚を感じさせるものが、被調査者の24.5%を占めていた。しかし、「これからだと思ったがすぐにだめなことを知らされた。」「はじめて生命の限界を知った。」という限界感の認識(10.2%)、や「人生の折り返し点を感じた。」「老後の生活に向かって歩き始めた。」というライフサイクルの上での転換期の認識(12.2%)、職業的、精神的な転換(8.2%)、さらに自分の再認識(4.1%)など、改めて、自分を問い合わせ、生き方の修正を求められた人が、はるかにそれを上回っていた。また別の一群として、「特に何も感じなかった。」「まだ20代とあまりかわらない感覚でいた。」と答えた人々が見られた(18.4%)。

TABLE 2は、SCT「私が自分の年齢を意識するのは」に対する反応である。TABLE 2に示したとおり、1. 体力の衰えや体調の変化、2. 対人関係、3. バイタリティや精神的变化に関するものが特徴的であり、1.2.は、過半数の人々にとって、自分の年齢を意識する契機になっていた。これらの内容のほとんどは否定的な変化を表わしているが、この点は中年期の変化を示す特徴の1つであると思われる。

TABLE 3は、SCT「私の一生のうちで今は」に対する反応である。この結果によると、TABLE 2に示したような自分の否定的变化の側面への気づきにもかかわらず、

TABLE 1 40才になった時の意識
(SCT「40歳になった時、私は」)

内 容	反 応 例	人 数	%
1. 生産的活力的自覚	・これからやるぞという気も ちだった。 ・転任したばかりではりきつ ていた。 ・子供のためにがんばらなく てはと思った。	12	24.5
2. ライフサイクルの上で転 換期の認識	・人生のおり返し点を感じた。 ・老後の生活に向かって歩き 始めた ・ふと過去を振り返った。	6	12.2
3. 限界感の認識	・はじめて生命の限界を知つ た。 ・これからだと思ったがすぐ にだめなことを知らされた。	5	10.2
4. 職業的・精神的転換	・子供も大きくなったり、再 就職をとすればかり考へて いた。 ・大きく精神的に転換した。	4	8.2
5. 自己の再認識	・自分の人生に責任をもつこ とを考えた。 ・自分を大切にしようと思つ た。	2	4.1
6. 実感なし	・意識したこととはなかった。 ・まだ20代とあまりかわらな い感覚でいた。	9	18.4
その他 無回答		3 8	6.1 16.3

過半数の人々が、安定感、充実感、幸福感などを表現し、現在を肯定的に認識していた。

これらの結果より、40代を中心とする中年期は転換期と意識されることが多く、この年代の意識内容には、否定的なものと肯定的なものの両面が見られることが示された。これらの意識の両面性に関しては、本調査においてさらに検討を加えた。

(2) Erikson の心理・社会的課題や危機の諸側面に関する特徴

自我同一性に関する SCT は、各々の項目別に、反応内容を分析した。予備調査の段階においても、個々の被調査者の人格像はかなりはっきりと描き出され、特に、時間的展望、自己確信、職業に対する意識や生産性に関して顕著な特徴が見られた。これらの内容については、面接調査でさらに詳細に分析されたため、本調査において報告する。

(3) 身体的・精神的自覚症

CMI に対する反応は、身体的自覚症 2 ~ 21、(Ave. 8.18)、精神的自覚症 0 ~ 24 (Ave. 5.82) に分布していた。これより、本研究の被調査者は、心身ともに健康であるとみなした。なお、(1)~(3)の結果には、職業による相違は特に認められなかった。

これまでの中年期の諸側面の変化に関する研究においては、中年期平穏説と危機説の両者が唱えられているが、本研究からも、この両者が予測される結果が得られた。中年期の安定感と転換期（危機）的な意識は、おそ

TABLE 2 年齢を意識する契機
(SCT「私が自分の年を意識するのは」)

内 容	反 応 例	人 数	%*
1. 体力の衰え・ 体調の変化に 関するもの	・老眼・ぎっくり腰、五十肩 になった。 ・疲労回復が遅い。 ・酒に弱くなった。	32	65.3
2. 対人関係に關 するもの	・若い人に接する時（考え方 の相違、エネルギーの差、 など）。 ・子供の成長を感じた時。 ・同年配や旧友に会う時。	26	53.1
3. バイタリティ や精神的変化 に関するもの	・集中力、記憶力の低下。精 神的疲労の増加。	17	34.7
4. 将来展望に關 するもの	・将来の生活（子供の将来、 定年退職後、老後）を考え る時。	2	4.1
5. 年齢そのもの に関するもの	・年齢をたずねられた時。 ・「40歳まで」という求人広 告を見た時。	8	16.3
6. 年齢を意識す ることはない		6	12.2

*反応の中には、複数の内容を記述したものがみられたため、パーセンテージは、100%をこえる。

TABLE 3 ライフサイクルの中で現在に対する意識
(SCT「私の一生のうちで今は」)

反 応 内 容	人 数	%
1. 充実して、幸福な時期	17	34.7
2. 公私ともに重要な時期	8	16.3
3. 安定して平穏な時期	8	16.3
4. 精神的、肉体的に苦労の多い時期	3	6.1
5. 転換期	3	6.1
6. 熟慮の時、自分を客観視できるようになった。	2	4.1
7. 特に意識しない。	3	6.1
無回答	5	10.2

らく個々人の中に異なった次元で並行して存在しているであろうと思われる。

本 調 査

目的

1. 40代を中心とする中年期の心理的変化の内容について、安定した側面と不安定な側面の特徴を、Erikson の図式に示された心理・社会的課題や危機の諸側面から明確化する。

2. 1. の特徴を中年期における自我同一性展開のプロセスとして縦断的に考察し、発達の諸段階を明らかにする。

3. 1. 2. の特徴を自我同一性ステータスの視点から分析することにより、個々の被調査者間に見られた相違について検討する。

方 法

(1) 被調査者

予備調査の被調査者の中から、SCT に対する記述内容が詳しく、中年期の心理的変化過程が明確に意識されていると思われる人を、各職業群から 3 ~ 5 名ずつ、合

計22名選択し、ひき続き本調査の対象とした。これらの被調査者のプロフィールは、TABLE 4 に示した。

(2)手続

以下の質問項目からなる半構成的面接を行った。個別に、ほぼ2~3時間ずつ、1~3回に分けて実施した。面接質問項目：①生育歴、②職業の経歴、③半生の中で心身に大きな変化のあった時期について、④40代の意識（40歳になった時の感情、40代で体験した心理的変化、厄年に対する感情）、⑤Eriksonの心理・社会的課題、および危機の諸侧面について（a. 時間的展望、b. 自己確信、自律性、c. 目的感、d. 勤勉性、有能感、e. 夫婦関係、f. 子供を育てること、g. 職業、h. 思想、価値観、人生に対する感じ方について、それぞれ、着眼点をそえて質問した*）、⑥青年期のモラトリアムや同一性危機の体験について。

(3)結果の整理

面接調査の結果は、(2)に示した質問項目のうち、④と⑤（a~h）については、各質問項目別に反応内容を整理し、特徴を分析した。まず、TABLE 5 に示したとおり、各質問項目別に各々の被調査者の反応を肯定的内容と否定的内容に分類した。そのうち、パーセンテージが50%をこえるものを、中年期の特徴的な変化を表すものとして、さらに詳しくその内容を検討した。同時に、各々の被調査者を個別に、臨床的、事例的に分析し、目的1~3にそって個々の被調査者の状態像の把握、考察を試みた。

結果と考察

(1)中年期の心理的変化の特徴

1)否定的変化の特徴

中年期の心理的変化の特徴は、面接質問項目のうち、④と⑤に対する反応を中心に分析した。これらの反応内容の概要は、TABLE 5 に示した。TABLE 5 に示したとおり、質問項目④40代の意識変化、および⑤のうち、時間的展望と職業の項目について、過半数の被調査者が、否定的な変化の体験を報告していた。これらの内容を、

*これらの質問内容の概略は、TABLE 5 に示した。

TABLE 4 面接調査対象者のプロフィール

群	事例番号	性別	年齢	退職予定年齢	職業	最終学歴	結婚	子供(年齢)	両親	同居家族
I 研究者群	1	男	51	63	大学教授	大学卒	既婚	3人(19,17,14)	△(34)	妻, 子供2人
	2	〃	42	63	短大教授	大学院修了	〃	2人(10,7)	△	妻, 子供
	3	〃	47	63	大学教授	〃	〃	2人(16,11)	△	母, 妻, 子供1人
	4	〃	47	63	〃	〃	〃	2人(18,12)	△	妻, 子供
II 会員群	5	〃	43	—	会社経営	大学卒	〃	3人(13,11,7)	△(72)	妻, 子供
	6	〃	44	60	会社役員	〃	〃	2人(16,15)	△(74)	妻, 子供
	7	女	48	56	会社員	〃	離婚	1人(23)	△(80)	妻, 子供
	8	〃	45	58	〃	高校卒	未婚	—	△	妻, 子供
	9	男	43	55	〃	〃	既婚	2人(13,10)	△	妻, 子供
III 公務員群	10	〃	44	60	事務系公務員	大学卒	〃	1人(7)	△	妻, 子供
	11	〃	52	58	〃	高校卒	〃	2人(20,17)	△	母, 妻, 子供
	12	〃	47	57	〃	大学卒	〃	2人(19,16)	△(74)	妻, 子供1人
	13	〃	42	60	〃	〃	〃	2人(14,5)	△(66)	妻, 子供
IV 高齢者群	14	〃	48	60	高校教員	大学卒	〃	2人(10,6)	△(75)	妻, 子供
	15	〃	46	60	〃	〃	〃	1人(15)	△	妻, 子供
	16	〃	48	60	〃	〃	〃	3人(17,15,7)	△	妻, 子供
V 看護婦群	17	女	52	65	看護婦	看護学校卒	死別	1人(30)	△	—
	18	〃	56	65	〃	〃	既婚	3人(35,33,28)	△	夫
	19	〃	53	65	〃	〃	〃	2人(25,22)	△	夫, 子供
VI 主婦群	20	〃	51	—	専業主婦	専門学校卒	〃	3人(24,22,15)	△	夫, 子供1人
	21	〃	42	—	〃	高校卒	〃	3人(17,14,8)	△(77)	夫, 子供
	22	〃	41	—	〃	大学卒	〃	2人(11,6)	△	夫, 子供

中年期における否定的変化の特徴としてさらに詳しく分析した。

自分が中年期に入ったことへの気づき、すなわち、もうそれほど若くはないという意識は、さまざまな面で自分の心身の調子が変化してきたことと、それによる限界感の認識から始まっていた。TABLE 6 に示したとおり、中年期の否定的変化には、以下の4つの側面が特徴的であった。

(a)体力の衰え

中年期の否定的変化を最も如実に認識させるのは、体力の衰えであり、22名中20名（90.9%）の被調査者にとって、これが自分の限界感を感じる最初の契機であった。また残りの2名（9.1%）も40代になって健康に対する関心が高まったと述べており、これも体調の変化が大きく影響していた。自分の身体に対する感覚や感情は、自己イメージを形成する大きな要であり、身体イメージは自我同一性の感覚とも深く関連している。したがって体力の低下をはじめとする身体感覚の変化は、同一性の基盤を脅し、再認識させるものと考えられる。

(b)時間的展望のせばまりと逆転

「残り時間が少ないという限界感は徐々に深まっている。」「何かをやり始めるにはもう遅すぎると常に感じる。」68.2%の被調査者から聞かれたこれらの現象は、時間的展望のせばまりと考えられる。これらは、自分の持ち得る時間的展望の中で「求めるものが得られない」（Erikson, 1964）という感情であり、被調査者にとって、この限界感は痛切であった。

TABLE 5 面接調査（質問項目④, ⑤）に対する反応内容

質問項目	質問内容	分類*	反応	%
40代の意識変化	・40代になって以前の自分との間に変化を感じるか。どんな変化があったか。	Pos.	・自分自身の安定感が増大した。自分は自分でしかないと考えるようになった。	63.6**
	・どのようにその変化に気づいたか。	Neg.	・40才をすぎて過去の自分の生い立ちから独立できた気がする。	100.0**
	・40をすぎて、自分の寿命や死について意識するようになった。		・体力に限界を感じるようになった。・健康に対する関心が増した。	54.5**
時間感覚時間的展望	・毎日どのように時間がすぎていくか。	Pos.	・毎日、前向きに忙しい。	9.1
	・将来(10年後、定年後)の自分について、どのように、どの程度考えているか。	Neu.	・毎日、仕事に追われてあつという間にすぎていく。先のことは予想できない。	22.7
		Neg.	・年令的に、もう間に合わないと感じることはよくある。 ・自分の活動できる時間はせばまっている。寿命の予測に合わせて計画をたてるようになつた。 ・10年後のことを考えると非常におもしろくない。可能性はうすく、さびしい。	68.2
自己確信	・自分や自分のしていることに確信がもてているか。	Pos.	・たいていのことはマイペースでやっている。以前のように周囲の目を気にしたり、動搖したりすることがなくなった。	54.5
	・職場や家庭で自由にやれているか、圧迫感があるか。	Neu.	・自分の意志で自分の生き方を決めてきたという意識はない。おちつくところへおちついってきた。	31.8
	・自分で決断できるか、優柔不断か。	Neg.	・思うとおりにできない。決断にも時間がかかるし、その反面ムキになるところがある。	13.7
目的感	・自分自身や自分のしていることの目的がはっきりしているか。	Pos.	・自分は何がしたいのか。割合、早くから意識していた。一貫している。	45.5
	・目的が実現してきている感じがもてるか。	Neu.	・あいまいである。・よくわからない。	22.7
		Neg.	・実体験としての目的感はあまりない。	31.8
勤勉性有能感	・自分のしていることについてうまくやっていけそうな感じがあるか。	Pos.	・40才をすぎて、年々業績があげられるようになった。なんとかやっていけるという感じがしてきた。	54.5
		Neu.	・ただ一生けんめいにやってきただけ。	22.8
		Neg.	・あまり感じたことがない。	22.7
夫婦関係	・夫婦生活にどの程度、満足しているか。	Pos.	・うまくいっている。	26.3
	・夫(妻)の見方がどのように変化してきたか。	Neu.	・夫婦の互いの見方は変化していないと思う。・別に何もない。・空気のようなもの。	63.2
		Neg.	・40をすぎて、夫の欠点が目につくようになった。	10.5
子供を育てる	・子供を育てるこや子供の巣立ちについて、どんな感じをもっているか。	Pos.	・子供のめんどうをみるのは楽しい。子供にも好かれている。	50.0
		Neu.	・子供の独立については、今は何とも感じない。	10.0
		Neg.	・子供が独立する(した)時のことを考えるとさびしい。今までの自分は何をしてきたのかと問い合わせた。	40.0
職業	・現在の仕事にどの程度満足しているか。	Pos.	・職業生活には十分満足している。自分のやりたいように研究できる。	27.3
	・以前のように仕事がはかどらない。あるいは、今やっていることをなげ出してしまういたいと思うことがあるか。	Neu.	・後継者を育てていきたい。	9.1
		Neg.	・今の仕事をせいいっぱいやっているだけ。	63.6
思想・価値観・人生観	・自分の傾倒する考え方や価値観があるか、それはいつ頃から出てきたか。	Pos.	・昔やっていたようには仕事がはかどらない。	31.8
	・これまでの人生をふり返ってどう感じるか。	Neu.	・自分の天職を見つけたという気はしない。	54.5
		Neg.	・もうこれ以上、新しいことをやろうという気はしない、もうこのままいいやという感じ。	13.7

* Pos. : Positive, Neu. : Neutral, Neg. : Negative.

** 複数回答がみられたため、パーセンテージは100%をこえる。

中年期に見られるもう1つの特徴は、「時間的展望の逆転」という現象である。8名(36.3%)の被調査者は、近親者や友人の死、中でも父親の死は自分の寿命を意識する大きなきっかけとなり、親の死によって、「自分があとどれだけ生きられるか」と考えたと報告していた。これらは、今まで生きてきた年齢ではなく、これから生きられる年数の方がより重要になり、死の側から自分の年齢を考えるようになったことを意味していると思われる。

(c) 生産性における限界感の認識

中年期にある職業人にとって、体力の衰えと時間的展望のせばまりによる限界感を最も痛切に感じるのは、職業や職業に対する能力においてであった。また、限界感

の認識によるあせりに加えて、「肉体のしんどさに加えて精神年齢のけだるさを感じる。」「だんだん怠惰になり努力をしなくなった。」という停滞感(Feelings of stagnation)が顕在化しており、これらの被調査者は、抑うつ状態を呈していた。

(d) 老いと死への不安

40代になって自分が老いていくことや死へ近づきつあることへの関心や不安が強くなったという報告は、54.5%の被調査者から聞かれた。その中には、「自分がいつ倒れてもよいように大事なものはまとめておく」というような具体的な準備をしている人があった。

2) 肯定的变化の特徴

TABLE 6 中年期の心理的変化の特徴

内 容	反 応 例	人 数 %
否 定 的 変 化	1.身体感覺の変化(体力の衰え・体調の変化) ・体力に限界を感じるようになった。 ・運動をしたあとの疲労回復が遅くなかった。 ・血圧が高くなつて、気分的にもイライラすることが多い。 ・健康に対する関心が増した。	22 100.0
	2.時間的展望のせばまりと逆転 ・何かをやり始めるにはもう遅すぎると常に感じる。 ・残り時間が少ないという限界感は徐々に深まっている。 ・近親者や友人の死によって、自分があとどれだけ生きられるかを考えるようになった。	15 68.2
	3.生産性における限界感の認識 ・以前のように仕事がはかどらないし、自分はこのへんまでしかできないのかという気になった。 ・若い頃の理想はうすれて、現実的、消極的になってきた。考えることも、仕事も、すべて、それにあわせている。もうどうにもならないというあせりを感じる。 ・40になつてもう自分の人生は終わったという気になった。もう、これまでいいやという感じ。	14 63.6
	4.老いと死への不安 ・40をすぎると、死はぐっと自分に近づいてくる。40をすぎて自分の死もやはりきけることができないのだと感じるようになった。 ・いつ死んでもよいように身辺整理をするようになった。 ・閉経によって、老いてゆくきびしさや老化した感じがぐんと強まった。	12 54.5
	5.自己確立感・安定感の増大 ・これまで学ぶ時期だったが、40代になつてようやく教えることができると感じるようになった。 ・私に対する会社での評価は、ベテランということになってきた。 ・自分は自分でしかない。まわりの条件によって自分が動かされない。 ・40才頃から、自分らしさや個性がでてきた感じがする。 ・40をすぎて、過去の自分の生い立ちから、独立した気がする。	14 63.6
	6.再生同一性の確立 TABLE 7 参照	3 13.7

中年期に入ったことは、1)で述べた否定的な変化への気づきによって意識化されたが、中年期の主観的意識の中には、肯定的変化も同時に存在していた。それは、TABLE 5に示したように、質問項目④40代の意識変化および⑤のうち自己確信と有能感の項目において特に顕著であり、過半数の被調査者が肯定的内容を報告していた。「これまで、学ぶ時期だったが、40代になってようやく教えることができると感じるようになった。」(事例2、42歳、男性、大学教官)、「私に対する会社での評価はベテランということになってきた。」(事例9、43歳、男性、会社員)という報告や、地域社会の中で認められ根づいてきたという意識、定住による安定感などは、40代になって自我同一性の確立感、安定感が増してきたことを示している。これらは多くの場合、40代の始めて意識されていた。

また、中年期に至つて初めて精神的な模索が終わり、より深いレベルで内的な安定感と自己確立感が得られた事例が3例見られた。これらの3事例では、外的には青年期に一応、自我同一性は獲得されているにもかかわらず、真に傾倒できる価値観、思想や真の自己像を求めての精神的な模索はその後も長く続き、中年期に至つて初めて本当に納得できる自分を見出して安定したという点が特徴的であった。筆者は、この3事例を、中年期の状態像を示す1タイプとして「積極的自己受容型」と名づけた(TABLE 10 参照)。以下に、そのうちの1事例を紹介する**。

事例16. 48歳、男性 高校教員

大学を卒業後、某私立高校の教師として社会科を教えていた。30歳の時、結核を患い、その頃から禅やカウンセリングなど内的なものに関心を持ち始めた。42歳の時、某大学へ内地留学し、1年間心理学を学んだ。以後、生徒の心理・教育相談を担当している。

彼は、40代の変化について次のように述べている。「42歳の時、1年間、単身で東京へ行ったがあの頃は、ガタガタしていた。今考えても転換期だったと思う。そのころまでは、過去の自分の環境や育ち、性格で気になることがずいぶんあった。が、5—6年前から、それは育ちのせいだという気がしなくなつた。過去の自分の生い立ちから独立した気がする。」彼は、自分を肯定的に見ることができるようにになったことが、自分の転換の基盤になったと語っている。彼は、青年期から、内省的な性格であったが、常に自分に対して否定的な見方の方がまさっていたという。40代に上記のような内的転換を体験したが、禅やカウンセリングなど、30代に始めたことが、その頃に実ってきたという実感も同時に体験されていた。本事例の場合、外的には、青年期に大学を卒業し、教師となった時期に自我同一性は達成されている。しかし、精神的には、それ以後の30代を通じて、真に肯定できる自分を求めて模索が続いていたと考えられる。

他の2事例も、中年期に至つて初めて精神的な模索が終わり、内的な安定感と自己確立感が得られたという共通の特徴を示していた。

3)再生同一性 (Renewed Identity) の確立

2)で述べた自我同一性の確立感や安定感は、青年期に方向づけられた同一性の軌道の上で認識されたものであり、1)で述べた否定的変化もまた、その軌道上での変化であった。しかし、本研究の被調査者の中には、青年期に選択した自分の方向づけを中年期の否定的変化の体験

**この事例の中年期における変化のプロセスについては、TABLE 8に示した。

を契機に問い合わせし、これらの生き方を模索した末に新しい生活様式や社会的役割を選択して自我同一性を再確立した事例が3例***見られた。これらの事例は、TABLE 7に示したような共通のプロセスをたどっている。彼らにとって、自分自身に対する問い合わせを行なう契機が、大病や子供の巣立ちという中年期の急激な否定的変化であった。この危機を経た後に獲得された同一性を、筆者は、「再生同一性」(Renewed Identity)と名づけた。以下に、TABLE 7に示した事例5について紹介する。

事例 5. 43歳 男性 会社経営

大学卒業後、某建設会社へ就職し、有能なエリート社員として活躍を続けた。30歳で若くして、某市支店長となり、以後、各地の支店長を歴任した。ところが41歳の時、大病を患い、それを機に退社、自分の会社を創設した。

この事例の場合、自我同一性は、青年期に大学を卒業し、就職した頃に一応達成されている。しかし、彼は、職業選択は、ほとんど迷いや試行錯誤なく、知人のすすめに従って決定しており、青年期の同一性スタイルは、早期完了型****に近かったと考えられる。彼は、有能なサラリーマンで、仕事一途の人であり、仕事においては、しっかりと自信と大きな成功感をもっていた。「私は、サラリーマンだったが、考え方は社長みたいになってしもうとする。全身をうちこんどったし、会社は自分の子供みたいな気がしていた。」というように、40歳までは、仕事(会社)が、彼の自我同一性の基盤であったと考えられる。

彼の方向転換の契機は、41歳の時、突然の大病という形でおこった。この入院体験によって、彼は、今までに味わったことのないみじめさと空虚感を体験する。この病気という危機が、自分の半生への省察を深め、自分を問い合わせ契機となった。特に「これからは、自分の考え方と行動が一致する方向へ行きたかった。」という彼の言葉から、外面のみならず、内面的にも納得できる自分を得たいという気もちが伺われる。彼の場合、自分で創設した会社は、現在はまだ安定しておらず、彼自身も、まだ新しい生活様式になじみこんでいるとはいえない。しかし、彼は、中年期の危機以前よりもはるかに納得できる生き方をしており、内的な自己肯定感も増大している。

他の2事例も同様に、青年期の同一性形成は早期完了的であったのに対して、中年期には、これから半生に

***再生同一性確立のプロセスの図式化には、事例数としては少ないが、この3事例は、中年期の自我同一性再体制化のプロセスを最も顕著に示していた事例であったため、1つのモデルとして図式化を試みた。この図式の確定は、今後の課題である。

****Foreclosure (Marcia, 1964).

対して、本当に納得できる生き方を模索した末に、深い自我闘争を伴って自分の方向を選択、決断している。これらの事例では、中年期に体験した変化がまさに「危機」と呼ばれるほどの大きな否定的変化であったにもかかわらず、それを主体的に受けとめ、以前の自分よりも肯定的に受けとめられる自分を獲得しなおしているという点が特徴的である。

これら、再生同一性達成型、および積極的自己受容型に分類された事例、すなわち、中年期に顕著な心理的変化が体験され、自我同一性の再確立が行われた事例は、6事例見られ、これは、被調査者の27.3%を占めていた。これらの事例は、中年期は自我同一性の真の確立に重要な意味をもつことを示すものであると考えられる。しかしながら、後述するように、これらのタイプの特徴や一般性については、今後、より多くの被調査者を対象に、さらに検討していく必要があろう。

(2)中年期の自我同一性展開のプロセス

以上の心理的変化は、各々の被調査者に自分の問い合わせと将来の再方向づけを促し、彼らの同一性に大きな影響を与えていた。これらの変化を、一転換期における自我同一性展開のプロセスとして縦断的に考察すると、以下の4つの特徴的な段階が見出せた。

〈第1段階：身体感覚の変化の認識にともなう危機期〉

自我同一性展開のプロセスの最初の段階であるこの時期は「もう若くはない」という自分の内的な変化を認識する気づきの段階である。(1)で述べたように、これらの変化は、体力の衰えをはじめとする身体感覚の変化に伴う自我同一性の基盤の動搖と時間的展望のせばまりによる生産性の危機、および老いと死への不安が特徴的であった。そして、この時期に体験される感情は、限界感の認識による焦燥感と抑うつ感が基調となっていた。

〈第2段階：自分の再吟味と再方向づけへの模索期〉

これらの否定的変化への認識がひきがねとなって、「自分はこれでよかったのか」「本当の自分は何なのか」という自分自身に対する問い合わせがおこる。この時期は、改めて自分の人生を振り返り、その意味の問い合わせが行われることが特徴であり、それは、これから半生の方向づけを決めるものである。この時期は、定年退職、老後、自分自身の死という人生の総決算が目前に迫ってきているという意識が強く、「もう遅すぎる」「もう間に合わない」という気持ちを強く感じるが、その一方で「まだやれる」という意識も大きい。このように、この時期は、自分自身に対する不安感やアンビバレンツな意識が特徴的である。

〈第3段階：軌道修正・軌道転換期〉

TABLE 7 再生同一性確立のプロセスとその事例

ライフステージ	プロセス	事例5 (43才, 男性, 会社経営)	事例18 (56才, 女性, 看護婦)
青年期	自我同一性の獲得 (やや早期完了的)	大学卒業後, すすめられるままに, 某建設会社に就職。	幼い頃からあこがれだった看護婦の資格をとったが, 就職しないままに結婚して, 家庭に入る。
30代	青年期に獲得した同一性の安定 (仕事・子育ての上で) (の成功感・充実感)	30才で, 営業所長となり, 以後各地の支店長を歴任。有能なビジネスマンであった。 「30代は仕事ばかりだった。仕事ではだれにも負けんという気であった。」	30代は, 子育てにエネルギーを注ぐ。
中年期	I 急激な否定的変化の体験 (空虚感)	41才の時に大病で入院。 「力いっぱい仕事をした結果, 大病をした。病名さえはつきりせず, 家族もガサガサしている。その時, なんと人生はみじめで, はかないものかと思った。」	40才で末子が高校入学。下宿して親元を離れる。 「38~9才までは, 子供のことで一生懸命だった。子供に手がかかるくなって、私は、1人ぼっちになるのではないか。自分も何か生きがいをみつけておかないと、子供の荷物になるのではないかと思った。」
	II 自分の再吟味と再方向づけへの摸索 ・これまでの自分の生き方の問い合わせ ・将来の再方向づけの摸索。	「だれも自分の生き方を教えてくれない。だから自分の道は, 自分で決断せねばならないと思った。」	再就職がし 「何か仕事があれば、さびしきをきりぬけられるのではないかと思った。それまでは自分の考えというものはなかったと思う。その頃から、どうしても、もう一度、看護婦として働いてみたいと思うようになった。そうでなければ何のために生まれてきたのかわからないような気がした。」
	III 軌道転換 ・深い自我関与をともなった新しい方向づけの選択と決断。 ・新しい生活様式への転換	会社を退社, 自分の会社を設立 「長い間支店長をやって、自分はサラリーマンのくせに経営者のようなものの考え方になってしまっている。だから、自分の考えと行動が一致する生き方がしたいと思った。だから、会社がいやでやめたのではなく、生きてきた道の方向転換をはかったということです。」「今から自分で会社をやっているとサラリーマンが、あと14.5年後に定年の時には絶対に精神的な差がつくという希望のようなものがあった。」	42才で、現在の病院に就職 「その頃は、女で働きに出る人はほとんどない時だった。が、42才の時、どうしてももう1度、努力してみたいと思い、夫を説得して、就職させてもらった。」
	IV 再生同一性の確立 (内的安定感と自己肯定感の増大)	「まだ会社の経営は安定しているとはいえないが、自分としては、今までよりもはるかに納得できる生き方をしている。」	「看護婦の仕事は適職で、本当に自分に合っていると思う。就職してからの15年は、ずっと自分のペースでやってきた。日々の生活にはりがある。」

「 」内は、被調査者の言葉をそのまま掲載した。

第2段階での「問い合わせ」にどういう答えを与えるか、そして、以後の人生にどのような方向づけを見出しかがこの段階の主要な課題である。この時期に、子供の巣立ち、親や友人の死、役割喪失など、第1段階の危機期に変化がみられた自分と対象との間に、再び適応した関係が得られるようになる。

〈第4段階：自我同一性再確定期〉

最終段階は、「自我同一性再確定期」であり、これは、軌道修正の結果、一応の安定が得られた時期である。中年期転換期の始まりに意識されたさまざまの変化にも慣れ、軌道修正期に得られた方向づけや対象関係にもなじみこみ、それを基盤に内的統合が進んでいく時期である。第1段階の否定的変化の認識による危機期よりも、自分が安定し、自分を肯定できるようになった場合が多い。

以上、中年期の変化過程を自我同一性展開のプロセスとして考察すると、4つの特徴的な段階があることが示唆された。この4段階は、中年期以前に獲得された同一性が、崩壊あるいは動搖し、再び組み直されて安定化していくプロセスを示している。したがってこのプロセスは「自我同一性再体制化のプロセス」と呼ぶことができると思われる。TABLE 8に、このプロセスの各段階にそ

って、いくつかの事例を呈示した。TABLE 8に示したとおり、40代という年代は、それ自体プロセスの途上にあり、本研究の被調査者がすべて、最終段階の「自我同一性再確定期」に達していたわけではない。ライフサイクルの中で現在（中年期）は、流動的なプロセスの中途であるという意識は、多くの被調査者（54.5%）によって報告されていた。

Mahler(1975)は、生後6か月から3歳までの乳幼児期を「分離一個体化」の時期とし、そのプロセスは4つの下位段階からなることを示している。また、Blos(1967)やBrandt(1977)によると、青年期の自我同一性発達のプロセスには、それに非常に類似した特徴が見られる。

TABLE 9に示したとおり、これらの乳幼児期、青年期に共通の特徴は、中年期の自我同一性再体制化のプロセスにおいても同様に見出された。すなわち、①このプロセスは、体力の衰えをはじめとする身体感覚の変化の認識が契機となっている。②その次の段階として、自分の問い合わせが行われ、将来へ向けての再方向づけが試みられる摸索期がある。③子供の自立や親、友人の死など、多くの対象関係に変化がおこる。④これらの変化に応じた軌道修正の結果、再び安定した自我同一性が確立され

TABLE 8 中年期の自我同一性再体制化のプロセスとその事例

段階	内 容	事例16 (積極的自己受容型*) (48才, 男性, 高校教師)	事例21 (模索最中型*) (42才, 女性, 主婦)	事例8 (不安防衛型*) (45才, 女性, 会社員)
I	身体感覚の変化の認識にともなう危機期 ・体力の衰え, 体調の変化への気づき ・バイタリティの衰えの認識	・体力の衰え, 健康への関心の増加, 関心のせばまりなど, 否定的な変化を体験。 ・40代前半の1年間, 単身で内地留学「その頃, 精神的不安定感, 自己否定感が強く, 精神的な転換期だった。」否定的変化の体験と精神的不安定期が重なっている。	・「健康に自信がなくなった。」「予供が大きくなり, ようやく自分をふり返る時間がもてるようになった。」「もうまにあわないとよく感じる」など, 体調の変化や予供の成長などにともない, 自己に対する意識が増加。	・体力, バイタリティの低下。 ・仕事, 能力での限界感。 ・時間的展望の逆転。 ・孤独感・人生のさびしさの再認識。など, さまざまな面で, 否定的变化が大きい。内的不安, 努力してきたが, あまり成果がなかったという思い, 空虚感が強い。将来の再方向づけを考えるには, 至っていない。
II	自分の再吟味と再方向づけへの模索期 ・自分の半生への問い合わせ ・将来への再方向づけの試み	「過去の自分の環境, 育ち, 性格などがしきりに気になった。」と, 自分の半生の見直しを行う。	「40才になって半生をふり返ってみた時, これまで夫の看病と育児しかなかつた。何のために生まれてきたのかわからないような気がした。」「何か自分にできることはないとさがしているが, まだ見つからない」空虚感, 焦燥感が強く, 人生後半期の生き方を模索しつつも, まだ, はっきりとした方向づけが得られていない。	
III	軌道修正・軌道転換期 ・将来へむけての生活, 値値観などの修正 ・自分と対象との関係の変化。	「職業や生活様式をかえる気はないが価値観が大きくかわった。その頃から自分をみつめるために, カウンセリングや禅に関心をもち始めた。」「45才をすぎて, 自分を肯定的に見られるようになったことが, 転換の基盤になった。過去の自分の生い立ちから独立したような気がする。周囲のものも肯定的に見られるようになり, 対人関係も協調的になった。」		
IV	自我同一性再確定期 ・自己安定感・肯定感の増大	「40代に新しく始めたこと (カウンセリングの勉強や禅) が, 最近になって実ってきたような気がする。」		

「 」内は, 被調査者の言葉をそのまま掲載した。

* TABLE 10 参照。

ること, である。これらの結果は, 中年期は, 乳幼児期, 青年期と並んで, ライフサイクルの中で重要な発達的危機期であり, この転換期は, 自我同一性の真の確立や成熟に大きな影響を及ぼすことを示唆するものであると考えられる。しかしながら, この自我同一性再体制化のプロセスは, 研究対象者数としては比較的少数の22名の事例から見出された結果を1つのモデルとして仮説的に提示したものである。このプロセスの一般性, 普遍性および, 各段階の特徴についての検討は, 今後に残された課題である。

(3) 中年期の自我同一性ステイタス

(1)(2)で述べた特徴は, 本研究の被調査者にほぼ共通して見られた基本的特徴であったが, 個々の被調査者の状態像には, かなりの相違が見られた。それらの相違は, (1)で報告した中年期の心理的変化を被調査者がどの程度, 主体的にうけとめているか, および(2)で述べた自我同一性再体制化のプロセスのどの段階にあるかに応じていた。

Marica (1964) は, 青年期の大学生を対象に, ①crisis (意志決定期間) と②commitment (積極的関与) の有無

によって, 同一性達成 (Identity Achiever), モラトリウム (Moratorium), 早期完了 (Foreclosure), 同一性拡散 (Identity Diffusion) という4つの同一性ステイタスを定義している。FIG. 1は, Marica の同一性ステイタス論を参考に, 成人期にみられる危機期に, 各々のステイタスがたどる同一性再体制化のプロセスを仮定したものである。成人期の同一性ステイタスは, それぞれの時期に遭遇するできごと (「危機の基盤となる事象」) をどう認知し, それをどう解決するかの連続によって定められると思われる。

そこで, 本研究では, 被調査者によって報告された中年期の変化過程を, ①危機 (心身の感覚の変化) の体験, ②自分の問い合わせと再方向づけへの模索, ③危機の解決 (軌道修正・転換), ④危機の解決後の安定 (現在の生活への積極的関与), の有無の4つの観点から分析した。これら①~④は, それぞれ(2)で述べた同一性再体制化のプロセスの第1~4段階に対応している。また, ②は Marica の crisis, ④は, commitment に対応すると考えられる。TABLE 10は, この分析の結果, 分類された

TABLE 9 ライフサイクルにおける3つの発達的危機期のプロセス

ライフステージ	乳・幼児期	青年期	中年期
研究者 プロセス	Mahler, M.S. (1975)	Brandt, D.E. (1977)	本研究
I	<ul style="list-style-type: none"> ■分化期 (Differentiation) ・自分でないもの (not me)の認識 ・自分の身体への 気づき 	<ul style="list-style-type: none"> ■身体の変化の認識 ・第1次・第2次性 徴の発現 ・(子供の体から大人 の体への変化) 	<ul style="list-style-type: none"> ■身体感覚の変化の 認識 ・体力の衰え・体調 の変化の認識 ・閉経 ・バイタリティの衰 えの認識
II	<ul style="list-style-type: none"> ■練習期 (Practicing) ・母親を情緒的ホー ムベースとして母 子の物理的分離 ・自律感の増大 	<ul style="list-style-type: none"> ■モラトリアム ・自分の役割の試み ・社会の中への自分 の位置づけの試み ・将来展望の確立の 試み 	<ul style="list-style-type: none"> ■自分の再吟味と再 方向づけへの模索 ・自分の半生への問 い直し ・将来への再方向づ けの試み。
III	<ul style="list-style-type: none"> ■再接近期 (Rapprochement) ・分離不安の増加 ・母親との親密さの 欲求 ・母親との最遠距離 をつかむことによ つて解決 	<ul style="list-style-type: none"> ■自分と対象との関 係の変化 ・親からの独立 ・社会への位置づけ と社会からの承認 の獲得 ・能動的な活動が可 能な適切な対象関 係の獲得 	<ul style="list-style-type: none"> ■軌道修正・軌道転 換(自分と対象と の関係の変化) ・子供の独立による 親の自立 ・社会との関係、親 や友人の死、役割 喪失・対象喪失な どの変化に対して、 適応的な関係の再 獲得
IV	<ul style="list-style-type: none"> ■個性(Individuality) の確立期 ・最初の同一性の感 覚を獲得 	<ul style="list-style-type: none"> ■自我同一性の確立 	<ul style="list-style-type: none"> ■自我同一性の再確 立

各々のタイプ*****の特徴を示したものである。

これらのうち、同一性達成群に属する再生同一性達成型、積極的自己受容型、安定マイベース型の人々は、同一性再体制化が完了しており、最も成熟した同一性を備えていると考えられる。TABLE 10 に示したように、再生同一性達成型と積極的自己受容型に分類された事例、すなわち、中年期に自我同一性の再体制化が顕著に行われ、自我同一性が再確立された事例は、6事例見られた。これは、(1)~(3)で述べたように、被調査者全体の27.3%にあたり、また、同一性再体制化のプロセスが完了した同一性達成群の54.5%を占めている。この結果によれば、中年期は自我同一性の再体制化が行われやすい時期であると推測される。

しかしながら、一方、(1)で述べた中年期の心身の変化にともなう不安定感をそれほど深く体験せず、かなりうまくそれらの変化に適応していった人々(安定マイベース型)が、本研究の被調査者の中では最も多く見られた

*****これらのタイプの分類は、筆者が行った後、他の評定者に検討を依頼した。タイプの分類、および命名については、討議の結果、多少修正した。

(22.7%)。また、一般的にもこういう人々はかなり多いのではないかと予測される。このタイプの人々は、中年期の心身の変化をそれほど大きな危機とは体験せず、従って、自分の再吟味や将来の再方向づけ、軌道修正もそれほど苦労なく行って、同一性再体制化プロセスの各段階を通過していった人々であろう。中年期に見られる同一性ステータスとその状態像の特徴や一般性については、自我同一性の再体制化がどの程度、中年期の一般的な現象であるのかという問題とも関連して、今後、さらに検討を加えていかねばならない。

本研究は、成人期の心理・社会的発達に関する基礎研究として行われたものである。本研究によって、中年期は、心身にさまざまな変化が見られ、この変化が自我同一性の再吟味を促すこと、また、中年期は自我同一性の再体制化が行われやすい時期であることが示唆された。これらの結果は、自我同一性は成人期において決して固定したものではなく、さらに展開し、成熟していくものであることを示している。成人期においても、同一性再体制化のプロセスが完了する毎に、個々人の自我同一性は成熟していくであろうと考えられる。

しかしながら、これまで述べてきた本研究の結果は、22名の被調査者から導き出された結果を1つのモデルとして提示したものであり、これらは未だ仮説の段階である。今後、より多くの人々を対象に、特に以下の点につ

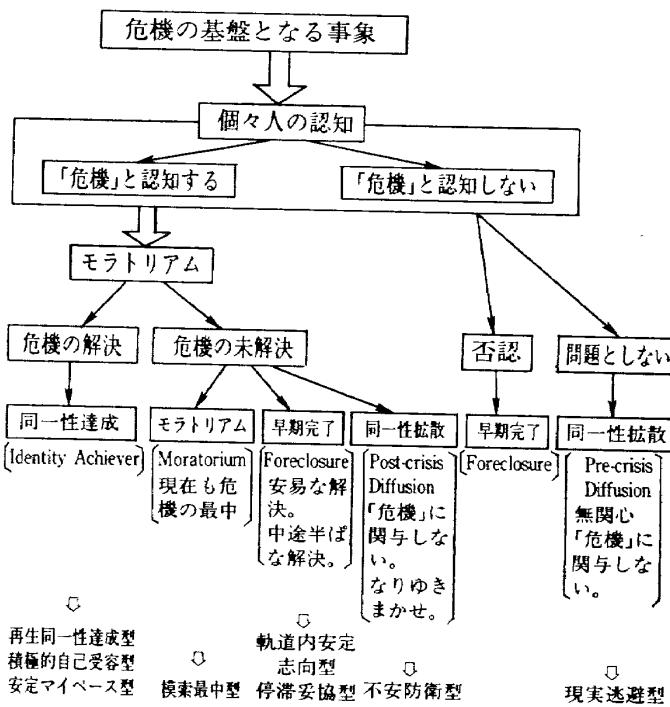


FIG. 1 各ステータスの自我同一性再体制化のプロセス*

*Whitbourne (1979) の仮説を筆者の研究にもとづいて再構成した。

TABLE 10 中年期の同一性ステータスとその状態像

同ステータス	Marciaの定義		本研究の定義				人	状態像
	(青年期を対象) crisis	commitment	I 危機の体験	II 自分の再吟味と再方向づけへの模索	III 危機の解決(軌道修正・転換)	IV 危機後の安定(積極的関与)		
同一性達成	すでに経験している	すでに体験した	すでに体験した	すでにしている	している	している	再生同一性達成	中年期に急激な否定的变化を体験し、それを契機に本当の自分の生き方を問いかね、新しい同一性を獲得したタイプ。新しい同一性の獲得によって生活様式や社会的役割に大きな変化がみられ、中年期以前に比べてより深い自己安定感・肯定感が得られた (TABLE 5 参照)。
								否定的变化は体験されているが、中年期に精神的安定感が増したことが顕著に自覚され、肯定的側面での変化が著しいタイプ。生活様式や社会的役割での変化はないが、中年期に価値観や自分に対する見方の転換があり、内的には、再生同一性達成型と考えられる。
								否定的变化による危機と、それにともなう自分の問い合わせや将来の再方向づけの時期を経験しているが、青年期に獲得された同一性が、そのまま中年期の同一性として受け入れられている。上記の2タイプほど大きな変化はみられない。
モラトリアム	現在経験中 あいまいである	現在体験中	現在体験中	しようとしている	していない	模索最中	2	自分の再吟味と再方向づけへの模索期の現象が、強く現われているタイプ。子供の独立などによる「つとめを終えた感じ」や空虚感が強く、人生後半期の生き方を模索しつつも、未だはっきりとした方向づけが得られていない。
早期完了	経験していない	している	あいまいである	あいまいである	あいまいである	している	軌道内安定志向	否定的变化は様々な面で感じているが、受動的にうけとめており、自分の問い合わせが少ない。内的には安定しており、現在の生活へもコミットしているが、将来の方向づけは妥協的であるか、あいまいにすまされている。
							停滞・妥協	否定的变化は意識しているが、中年期に入って、「もうこのまままでいい」という気持ちが強く、消極性・停滞感が特徴的である。したがって、自分の問い合わせはあいまいであり、将来の方向づけも消極的である。
同危機後括弧	すでに経験した	していない	すでに体験した	できない/しようとしていない	できない	していない	不安防衛	中年期に入り、否定的变化の認識とともに、精神的動搖や不安・空虚感が強く、内的な危機が大きいタイプ。外的圧迫感や無力感が強く、社会的な適応は、一応できているが防衛的である。
同危機前性開放	経験していない	していない	あいまいである	できない/しようとしていない	できない	していない	現実逃避	中年期の否定的变化に対して無関心や否認がめだち、これが、自分の問い合わせにむすびついていない。現在の自分の状況把握にも歪曲がみられ、現実逃避的、かなり不適応的である。

いて考察、検討を深めていく必要があると思われる。

まず第1に、中年期の同一性再体制化は、社会的階層、知的文化的水準、心身の健康度等にかかわらず、どの程度の一般性、普遍性をもった現象であるのかという問題である。本研究の被調査者は、適応度や安定度が比較的高く、また高い同一性ステータスに分類された人々が多かったが、これは、精神的、身体的に健康で知的水準の高い職業群に属する人々を調査対象としたためであると思われる。本研究の対象者は、教師が男性対象者の50%を占めていたが、他の職業群や女性を対象にした研究も重要であろう。また、本研究によって見出されたライフサイクルにおける3つの発達的危機期の類似点 (TABLE 9)に関してもさらに検討を加えることが必要であろう。

本研究は、質問紙による同一性研究と同様に、自我同一性の意識されている側面に焦点化して行われた。面接という手法を用いたため、多くの質問紙調査よりもそれ

らの意識内容は深く把握でき、意識変化のプロセスもかなり明確化された。しかし、これらは自我同一性の一側面にすぎない。自我同一性の再体制化については、さまざまな角度から、今後もさらに考察を深めていかねばならない。

第2に、中年期に顕著に同一性再体制化が行われた事例と、その他の事例の相違点や関連性の考察も重要な課題であろう。再生同一性達成型、積極的自己受容型に代表されるように、中年期に顕著な自我同一性の再確立が認められた事例、安定マイペース型のように比較的徐々に中年期の変化に適応し、自我同一性にそれほど大きな変化が見られなかった事例、また、不安防衛型、現実逃避型のように、再体制化プロセスの第1段階の不安定期に長くとどまり、再体制化が進まない事例の相違は、どういう要因によるのであろうか。

本研究によれば、再生同一性達成型は、青年期の自我同一性ステータスは、早期完了型に近いことが予測され

ている。また、積極的自己受容型の青年期の同一性は、内面的にはモラトリアム的な一面を残していたことが推測される。このように、中年期の自我同一性を考察するには、それ以前の同一性の確立、展開のプロセスを総合的に検討していく視点が必要であろう。

最後に、「発達的危機」の概念について述べておきたい。発達は、これまで、ただ前向きのものとしてとらえていたが、Erikson (1950) は、退行的要素と病理的方向への動きをも含めて考えられることを示唆して「危機」と呼び、成人期にも、それぞれの時期に問題となりやすい心理・社会的課題にともなう危機があるとした (Intimacy crisis, Generativity crisis, Integrity crisis)。Erikson によれば、自我同一性の危機そのものは、青年後期の問題である。それに対して、自我同一性の危機は青年期のみにとどまらず、成人期にも存在するという視点が本研究の基礎となっている。中年期に顕在化しやすい危機は、生産性・生殖性の危機であるが、本研究によれば、生産性における限界感の認識は、自分の再吟味の契機となり、自我同一性の再体制化を促すものであった。この結果は、青年期に獲得された自我同一性(特に、不十分にしか確立されていない自我同一性)は、以後の成人期により十分に確立され直すことが求められることを示していると考えられる。

また、Marcia の同一性ステータスは、青年期を対象に定義されたものであるが、同様の臨床的特質をもつステータスは、本研究の中年期の被調査者にも見出された。これらの同一性ステータスや同一性再体制化のプロセスは、成人期のさまざまな「危機期」に共通に見られるものであろうか。また、成人期の同一性再体制化のプロセスを促進し、同一性ステータスを決定する条件や要因、すなわち、自我同一性の成熟を促す条件や要因はどういうものであろうか。これらは、成人期の発達を考察する上で、今後に残された重要な課題であると思われる。

引用文献

- Bios, P. 1967 The second individuation process of adolescence. In R. S. Eissler & H. Hartmann (Eds.) *The Psychoanalytic Study of Child*. New York : International University Press, 22, 162-186.
- Brandt, D. E. 1977 Separation and identity in adolescence: Erikson and Mahler some similarities. *Contemporary Psychoanalysis*, 13, 507-518.
- Donovan, J. M. 1975 Identity status and interpersonal style. *Journal of Youth and Adolescence*, 4, 37-55.
- Donovan, J. M. 1975 Identity status: Its relationship

- to Rorschch performance and to daily life pattern. *Adolescence*, 10, 29-44.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton & Company.
- (仁科弥生訳 1977, 1980 幼児期と社会 1, 2 みすず書房)
- Erikson, E. H. 1964 *Insight and Responsibility*. New York: W. W. Norton & Company.
- (鰐幹八郎訳 1971 洞察と責任 誠信書房)
- Jaques, E. 1965 Death and the mid-life crisis. *International Journal of Psychoanalysis*, 43, 502-514.
- Levinson, D. J. 1974 Periods in the adult development in men: Ages 18-45. *Counseling Psychologist*, 6, 21-25.
- Levinson, D. J. 1978 *The Seasons of Man's Life*. New York: Alfred A. Knopf, Co.
- (南博訳 1980 人生の四季 講談社)
- Lionells, M. L. & Mann, C. H. 1974 From crisis to potential: New perception in middle age. paper read at William Aranson White Institute.
- Livson, F. B. 1976 Patterns of personality development in middle aged women: A longitudinal study. *International Journal of Aging and Human development*, 7, 107-115.
- Lowenthal, M. F. 1972 Transition to the empty nest crisis, challenge, or relief? *Archives of General Psychology*, 26, 8-14.
- Mahler, M. S. 1975 *The Psychological Birth of the Human Infant: Symbiosis and Individuation*. New York: Basic Books.
- (高橋雅士他訳 1981 乳幼児の心理的誕生 黎明書房)
- Marcia, J. E. 1964 Determination and construct validity of ego identity status. Unpublished doctoral dissertation, The Ohio State University.
- Marcia, J. E. 1976 Identity six year after: A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, 5, 145-160.
- Neugarten, B. L. 1968 *Middle Age and Aging*. Chicago : University of Chicago Press.
- Rosenberg, S. D. 1976 Identity and crisis in middle aged men. *International Journal of Aging and Human Development*, 7, 153-170.
- Sheehy, G. 1974 *Passages Predictable Crises of Adult Life*. New York : Dutton & Co.
- (深沢道子訳 1978 パッセージ——人生の危機 ——プレジデント社)
- Whitbourne, S. K. 1979 *Adult Development: The Differentiation of Experience*. New York : Holt, Rinehart & Winston.

〈附記〉

本研究は、1980年に広島大学教育学部に提出された修士論文の一部を加筆修正したものである。研究にあたってご懇切なご指導を賜わり、本論文をご校閲いただいた広島大学教育学部教授、鰐幹八郎先生に深く感謝いたします。

(1985年4月2日受稿)